



東京八王子プロバスクラブ

創立 1995 年 10 月 18 日

# プロバスだより

第294号

2020年5月14日発行

編集・発行：情報委員会

2019～20年度 テーマ

素敵に輝いて 素敵なクラブライフを！

## 第 294 回 例会 (中止)

3 月定例会に引き続き、4 月 9 日 (木) に予定されていましたが第 294 回プロバスクラブ定例会は中止となりました。理由は新型コロナウイルス蔓延防止の為に、集会等の自粛が求められているからです。

従って、今月号も例会等の事業報告はありませんが、会長のメッセージとその後の状況等についての幹事報告、会員の投稿を掲載します。

### 会員の皆様へ

会長 飯田 富美子

この度は新型コロナウイルス感染症により亡くなられた方々及びご家族・関係者の皆様には謹んでお悔やみ申し上げますとともに、待機や入院治療されている方々に心からのお見舞いを申し上げます。さらに、医療関係者、ライフラインを守っていただいている関係者には厚く御礼申し上げます。

つつじの花が咲き、鉄線が美しく咲いている昨日、今日この頃、心のゆとりもなく愛でる気持ちも萎えています。プロバスクラブの皆様には如何お過ごしでしょうか。1 月来続いている新型コロナウイルス感染拡大はまだ先が見通せない状況の中、悩ましい日々をお過ごしのことと存じます。

今年に入り 3 月と 4 月の例会、学習サロン・野外サロン等々すべての活動も中止となり、皆様とお会いできない日々が続いておりますこと、私としましても辛い、淋しい思いをいたしております。

緊急事態宣言が出てからは外出自粛により我慢と辛抱の日々が続いています。皆様におかれましても細心のご注意をもってお過ごしください。コロナ感染拡大の一日も早い終息を願い、皆様との再会の日を楽しみにしています。

### 幹事報告

3 月に続いて 4 月例会も中止

幹事 一瀬 明

まことに残念ながら先月に続いて 4 月の例会も中止のやむなきに至りました。

4 月 2 日 (木) 4 月度の理事会がびおらで「換気を良くし、席も離して、全員マスク着用」という万全の感染防止対策をした上で、重苦しい雰囲気の中開催されました。

「1 週間後の例会をどうするか」が難しい大きな課題でしたが新型コロナウイルス感染の拡大は悪化の一途をたどっており、緊急事態宣言ギリギリの客観情勢の下ではいかんともしがたく「例会中止やむなし」で理事全員の認識は一致、中止を決議いたしました。

ただ長い間プロバス会員と顔を合わせる機会も失われており、コミュニケーションが途絶えているのも大きな問題であり、何らかの方策をとろうということになりました。

その結果、プロバスだより 2 か月分と宇宙の学校 (本年度生徒募集中止が決まりました) の PR チラシ、さらには当クラブ 25 周年記念事業 (杉山委員長の下で準備を進めています) のチラシなどを一括して会員各自に郵送してお届けしようということを決めました。この件については例会委員長にお骨折りいただきます。

こんな中ですが来月 5 月には臨時総会で次期体制を決める必要もあります。25 年続いている我々のプロバス活動を途切らすわけにはまいりません。それに向けての準備も次期田中新会長中心に進めてまいります。この取り組みについても、理事会として確認いたしました。

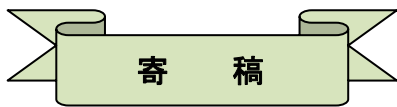
2 月例会にお見えになっていた丸山恭さんの入会も承認されました。次の例会から参加されます。その結果、会員は 60 名、平均年齢は 80.3 歳になりました。

した。

さらに、8月に五所川原で予定されていた全日本プロバス協議会の総会も延期になりました。当クラブからも多数参加を予定していましたが、次の開催期日は未定です。

5月に予定されていた八王子市の健康フェスタも中止の連絡がありました。例年会員の何人かにお手伝いをお願いしておりましたが見合わせることにいたします。

5月以降皆さんと元気にお会いする機会ができますよう切に願って4月の幹事報告といたします。



### 三食昼寝つき

岡田 尚



かれこれ7年になるかな、家内を亡くしたのは。それも病院の幼稚なミスが原因だった。その時、家内は要介護5で、寝たきりの状態でした。

私も80才になり仕事も一区切りをつけようと思っていた。子供達の提案で、全員で旅行をしたいなということになった。可哀そうだが、家内を連れていくことは出来ないで、病院に預ける事にした。

行き先は、私が生まれた四国の高知県にすることになり、まず足摺岬、四万十、高知市内の順に観光する事が決まった。子供と孫達総勢で13名の大所帯である。まず空路で高知空港に、レンタカーで足摺岬のホテルに直行、その日は近場を観光して休むことにした。

翌朝早い頃、病院から電話があり至急医療センターに来て欲しいとのことであった。飛行機の手配をしようとしたが、5月の連休中で切符が3枚しか取れず、取りあえず私と長女夫婦の3人で帰ることにした。足摺岬の観光は諦め全員高知市内まで帰り、切符が手に入るまで市内観光をすることにした。

医療センターの救急医療の部屋で、機械に沢山のパイプでつながれた家内がいたが、私達が来るまで心臓を動かしてくれているだけだった。

その後、家内を預けた病院による事故の内容の説明を受けたが、腹が立つ様な内容であった。担当の看護師の幼稚なミスによるものと正直に説明があり、病院の誠意は良く分かり、若い看護師は可哀想なほどしょげ切っていた。

このような事での他界は許せないが、これから何年寝たきりで、話も意思表示も出来ず生きている事の方が辛いだろうと、考えを変える事にした。毎日お供えと線香を忘れないようにしている。

さて、その後の私だが、食事を作るのが苦手で、インスタントラーメンぐらいしか作ったことがない。それも何度か焦がして、部屋中煙で真っ白になり「火事です！火事です！」と警報器を何度か鳴らした事があり、その後一切コンロは使わないことにしている。追分町のマンションに住んでいたが、近所に食べる場所がなくて、三食とも外食の私には誠に不便で、これを満たしてくれる所はないかと考え、老人ホームを探して今のアメニティホーム八王子に決めたのである。

現在は三食昼寝つきで、気楽に遊んで暮らしています。

### 私の半生「医療現場の六十年」

根本 洋子



私が半生を捧げた医療現場は令和元年に開設100周年を迎えた医療法人財団興和会右田病院です。右田病院は大正8年、第一次世界大戦後の恐慌の時代、大横町に「右田医院」として開設され、昭和2年に本町に移転、昭和8年に「右田病院」として救急医療も開始しました。昭和20年8月2日の八王子大空襲により病院は焼失、翌21年に再建、昭和27年には医療法人財団興和会が設立され、昭和35年には施設の増改築が行われ、施設の一部は鉄筋化されました。

昭和37年、こうした歴史ある右田病院に私は一事務員として就職、以来今日まで60年にわたって病院の管理業務に従事して参りました。私が就職した当時はまだ古い木造の建物で、廊下は狭く、床板は強く踏むと抜けてしまいそうな状態でした。夏は暑さ

との冬は寒さとの戦いでした。冬の病室は火鉢一つが唯一の暖房でした。冬の朝出勤した私の最初の仕事は、通りを挟んだ右田家の自宅に練炭の火種を貰いに行くことでした。そして院内の幾つもの火鉢の練炭に火を付けて回りました。

昭和40年当時、月末になると私達事務職員はレセプトの整理に追われました。数日間は深夜の2時ぐらいいまでかかり、右田家の客間に泊まることも度々でした。こうした時、右田家の方々は気を配って下さり、風呂まで用意して下さいお心遣いは本当にありがたく、仕事の苦勞を忘れさせてくれました。

当時は結婚すると退職するのが普通でしたから、事務職の先輩の方々が次々と退職され、私は3年目には事務方のリーダーを任されるようになっていました。主な仕事は、今でいうソーシャルワーカーに近いもので、当時は経済的な弱者の方々への対応が多くありました。救急で搬送される患者さんの中には、ホームレスの方、保険証の無い方、所持金の無い方など様々でした。こうした時、右田病院では分け隔てなく診療に当り、治療に専念される先生方の姿にいつも感銘を受けていました。

診察・治療が終わると私達の出番です。福祉事務所に連絡を取ると、お金や保険証が無くても「治療を優先」の指示があり、患者さん中心の対応をして下さいました。最近でこそ、制度的に整備され、厳格に運用されていますが、矢張りその根底には人間的なやさしさが必要なことを痛感しています。市役所も警察も消防署も相互信頼に基づく、臨機応変の連携プレーができた時代でした。患者さんやその家族にとって何が必要なのか、事務処理の枠を越えたマニュアルにない心のマニュアルが求められ、それを可能にしたのは、右田病院の伝統的な「人間的なやさしさ」が根底にあるからだと信じております。

この精神は後に定められた右田病院の経営の理念に、①患者さん本意の地域医療、②家族的な触れ合いサービス、③小回りのきく治療の実践。とあるように、病院の基本理念としても貫かれていると思います。

多くの方々との巡りあいの中で私はここまで支えられ、成長できたものと思います。特に設立者の右田家の家庭的な温かいマインドを持った方々。そして、実母と今は亡き北村とよ子さんの存在を忘れる

ことはできません。

母は貧しい生活の中で、人への思い遣りの心を忘れない人でした。戦後の食糧難の時代、やっとの思いで手に入れた米を近所の人に「貸して」と頼まれば分けてあげるような人でした。子供心に「折角のお米をどうして！」と聞くと「どんな思いで貸してと頼んでいると思うの。貸してあげられることの有難さを考えなさい。」と私を諭すのでした。こうした母の日常の姿が今日私のお手本になっていることを強く感じています。

西八王子病院の理事長であった北村とよ子さんは、警視庁の傘下にある東京母の会連合会の会長として、地域の安全、安心のためのボランティア活動を推進された方であり、私が連合会活動に関わるきっかけを作って頂いた方でもあります。私がこの会の奉仕活動を30年以上も続けてこられたのも、北村さんを尊敬し、その凜とした生き方に少しでも近づきたいと思ってきたからです。

病院という職場で私は患者さんとの数えきれない出会いがありました。その出会いの一つ一つが私を成長させ、職務に励む原動力となりました。多くの諸先輩に恵まれ「人あってこそこの私」が今日あるものと感謝の念に堪えません。

私が半生を捧げ、私を育て支えてくれた病院という職場。その右田病院の設立100周年という記念すべき節目に巡り会うことができたことを機に「私の半生」を振り返ってみました。

## 新型コロナと家籠り

持田 律三

新型コロナウイルスの感染が2月より全国に広がり、ついに4月7日には緊急事態宣言が発令された。以後、外出自粛要請が一段と強くなりわれわれの行動変容を強いられている。確かに欧米のニュースを見ると数週間で医療の崩壊が起こるという怖さがある。ワクチンや治療薬がないのだから不安である。

私は趣味に短歌、水彩画、ゴルフなどをやってい



るが今はすべてが休止状態で、人と交流する時間が失われ、自宅に籠もる日々となってしまった。

そんな折り、庭に牡丹が咲いた、2年振りに大きな花を咲かせた。(写真)

「牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置のたしかさ」木下利玄の有名な歌であるが、結核にかかり病床に伏して、花に託して自分の心も静かに落ち着いていると詠っている。私は病床ではないが、コロナ感染防止のために家に籠り、不安で不自由な生活をしている中で、さながら作者のような思いに浸り、牡丹を鑑賞する貴重なひと時を持つことができた。

春の花と言えば、やはり桜は格別である。家に籠る時が多くなったので、改めて西行法師の歌を読んだ。数百首の桜の歌を西行は残していると言われるが、中にこんな歌がある。

「吉野山こぞの枝折の道かへてまだ見ぬかたの花を尋ん」(去年枝を折って印をつけておいたが今年



道を変えてまだ見えない花をみてみよう)という歌であり、未知のものを尋ねて止まない前向きの生き方が溢れ出ている。

もうひとつ、「春ふかみ枝もゆるがで散る花は風のとがにはあらぬなるべし」(枝も揺るがないのに散る花を風の咎(とが)にはしてはいけない)という歌。西行はいろいろな苦しみを乗り越えて、花や風を非情なものから有情な存在として捉えようとする姿勢を持ち、散る花びらを風の所為にしてはいけないと詠む。

あまり家に籠り過ぎているので、近隣へのウォーキングを始めた。徐々に歩数を伸ばして6千歩を毎日歩いて既に数週間になる。健康にも良いし、短歌の材料も見つかりやすい。遠くに富士山、近くには高尾山を眺めながらのウォーキングはもっと早くからやれば良かったと思っている。しかし、最近の歌は山々を眺めてもコロナの歌が圧倒的に多い。最近の自粛に圧されて「コロナ禍に籠り続けて数週間夫婦ふたりのごこちなき日々」、また「新型の肺炎感染鎮まらず手洗ひせしかと孫に言はるる」。

コロナ禍で如何に写實的に歌を詠むか、悩みながらのウォーキングの毎日である。

私の一句〈四月の句会から〉

河合 和郎

コロナ対策により4月の定例会も中止となった。行事や会合がカレンダーから消え、通算百回となる俳句会も開けなくなった。そこで4月はインターネットを介しての紙上句会となった。

碁敵のふと手が止まる春の雪 田中 信昭

囲碁の対戦中に一句浮かぶとは早や達人の域。中七の措辞がいい。勝負はもちろん中押し勝ちで。

すみれ咲く遠き日の歌口ずさむ 下山 邦夫

越路吹雪の「すみれの花が咲く頃」の名曲あり。遠く甘酸っぱい青春のあの日の思い出を一句に。

花咲く間散る間も見ずに四月逝く 飯田富美子

今年の春はコロナ騒動で日常のリズムがすっかり乱れてしまった。桜も気が付けば早や葉桜に。

二児を乗せ自転車の母春の土手 馬場 征彦

子育て真っ最中の逞しいお母さん。ママチャリ戦士の奮闘ぶりが目に浮かぶ。俳諧味満点の一句。

学び舎の無人の庭に桜咲く 野口 浩平

コロナ禍は学校から子供の姿を奪った。満開の桜の下で遊ぶ子らの声も無い。平穏な日常を祈るのみ。

初蝶や未だ覚めきれず身じろがず 東山 榮

10人の句会で9人が選んだ。満票の一句。生まれたての蝶の姿を「覚めきれず身じろがず」と活写。

春雷や寝覚めの床を叩き去り 矢島 一雄

春眠暁を覚えずと春の目覚めは物憂いもの。そこへ春雷一声。この句は下五の措辞で決まった。

春の岬巡れば遙か洋々と 池田ときえ

「洋」の兼題句。大きな景が詠めた。「こんな景色の中をゆっくりと歩いてみたい」とは作者の願望。

茶柱に和む相老い春炬燵 河合 和郎

「あら茶柱が」「今日はいいことあるかな」。老夫婦の日常の一コマ。金婚を幾つか超えた春の一日。

編集後記：コロナ禍により例会は3月に続いて4月も中止。日常生活もじっと我慢の毎日が続く。とにかくウイルスを抑え込むことが先決。まずは自分を、家族を、そしてプロバスの仲間を守ろう。

情報委員会